

# 『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌のなかの日本

## —— 南方熊楠と日本関連論考 ——

志 村 真 幸

### はじめに

イギリスの文系総合学術誌『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌（以下、『N & Q』誌と略記）には、1899-1933年に南方熊楠の英文論考324本が掲載された。同誌はイギリスを中心とした欧米のアマチュア知識人が、フォークロア、民俗学、語源、文学、歴史、人物などについて議論した投稿誌であり、熊楠の論考もこうしたテーマに関連するものが多い。私はこれまで、当時のイギリスではプロ／アマチュア知識人によって知識の集積が進められており、熊楠もそこにひとりの情報提供者として参加していたと論じてきた<sup>(1)</sup>。

本稿では、『N & Q』誌における日本関連論考を分析対象とする。目的は3点あり、第一は、日本という国や文化への関心が、『N & Q』誌においてどのくらい存在したのかを確認すること、第二は、熊楠がもっていた日本／東洋の情報提供者としての自意識に迫ること、そして第三が、もうひとりの日本人投稿者・佐藤彦四郎について見ることである。

先行研究としては、まず宮澤眞一「NOTES & QUERIESの日本関係記事にみる日英交流の推移」<sup>(2)</sup>が挙げられる。しかし、この研究は実は未完なのである。これは前編にあたり、つづく後編で熊楠を中心に扱うと予告されているのだが、結局執筆されなかった。前編では、時代順にいくつかのテーマを取り上げたに留まり、後編で書かれたであろう分析や結論も欠けている。

熊楠の英文論考については、田村義也らが、熊楠が東洋からの情報提供者という立場にあった点を指摘している。『ネイチャー』誌でのデビュー論考が「東洋の星座」だったことから、熊楠が欧米の学界において東洋の専門家として機能し、また自身でもそのように意識していたのは間違いない<sup>(3)</sup>。しかし、熊楠の日本人、東洋からの情報提供者という意識については、注意を払わなければならない。熊楠が英文論考執筆の際に、日本の書物や漢籍だけでなく、英語やフランス語等で書かれた欧米の文献も扱っていた点は見逃ごせない。本稿では『N & Q』誌の日本関連論考の分析により、熊楠が東洋からの情報提供者であったという見方を補強しつつも、やや異なった方向性を見出すことをめざす。

## 2. 『N & Q』誌の日本関連論考

本稿では、創刊から1930年代末までの『N & Q』誌を対象とする(1849年11月3日号～1939年12月29日号)。1940年代以降は雑誌の性格が大きく変化し、英文学専門誌になるためである。資料としては、『N & Q』本誌、半年ごとに発行されるインデックス、オンライン版を用い、タイトルに日本や日本人(Japan, Japanese, Japonaise)をふくむ論考をすべて拾い出し、内容に目を通した。こうして抽出した日本関連論考の一覧が<表1>で、81のトピックで合計153本の論考が出ている。ここで説明しておく、『N & Q』誌は投稿誌であり、誌上での読者同士の質疑応答が中心となっていた。誰かがノート(短報)を書いたり、クエリー(質問)を発すると、それに対して読者がリプライ(回答。複数本寄せられることも多い)を返す。そのため、ノート、クエリー、リプライという一連の質疑応答によってひとつの話題・議論が構成されることになる。このひとかたまりをトピックと呼ぶことにする。なお、論考の種類としては、編集部記事のメモラビリア、ミセラニアス(書評、学会情報、死亡記事など)もある<sup>(4)</sup>。

もちろん、タイトルに日本や日本人となくとも、内容で日本を取り上げている論考も少なくない。熊楠にも多数ある。しかし、タイトルだけに絞ったのは、該当期間に出た総論考数は数万本にのぼると推計され、すべての論考を扱うのは不可能なためである。加えて、投稿者／読者の意識も指摘しておきたい。すなわち、ノートやクエリーのタイトルの「日本」は、この論考は日本を扱っているという明確な主張なのである。リプライを書く際の選択の基準ともなる。読み手においても同じで、「日本」とある論考は日本に関心のある読者をひきつける。『N & Q』誌には、毎号約50本の論考が掲載されており(たとえば1930年1月4日号は全20頁で、ノート6本、クエリー23本、リプライ22本が出ている)、このなかから読者は、目次を見て、関心のある論考を読むわけである。もちろん通読する読者もいただろうが、熊楠などはまず目次をチェックしてから読んでいたことがわかっている。つまり、タイトルに日本と入っていることには、それなりの意味がある。当たり前のことではあるのだが、以後の議論に関係してくるため、ここで確認した。

最初に東洋全体／各地に関する論考を俯瞰して、「日本」の占めた位置を見ておきたい。同期間の『N & Q』誌を対象に、タイトルにアジアの国名等をふくむ論考についてオンライン版で調査した結果を<表2>に示した。こちらはすべてに目を通し、整理できたわけではないので、論考数のみとする。その結果は、インド関連がもっとも多く、次いで中国、日本、ベルシャとなる。これは投稿者／読者の関心を反映し、さらには英語文献の多寡、現地からの情報提供者の有無等に影響されていると考えられる。たとえば、インドはイギリス植民地であったため、多くのイギリス人が入り込み、無数の英語文献が出版されていた。そのため投稿者のほとんどもイギリス人となる。ただし、少数のインド人投稿者がおり、V. Chattopadhyayaの論考が1909-12年に15本、Virendra Vandyopadhyayaが1930-40年に51本、K. K. Inihrotraが1938年に1本となっている。中国人投稿者については、Duh Ah Co(漢字不明、1904-06年に13本が掲載)と1人だけしか

## &lt;表1 タイトルに日本、日本人等をふくむ『N &amp; Q』誌掲載日本関連論考一覧&gt;

1行目：①トピック番号、②タイトル

2行目：③掲載年月日、④掲載号の巻数頁（集・巻は何回か変更あり）、⑤投稿者名、⑥ノート、クエリー、リプライ、メモラビリア等の別、⑦タイトルの異同

3行目：内容

## 【1850年代】

## 1. Ludovicus Frois: his "History of Japan"

1857年6月13日号 2集3巻466頁 Henry T. Riley マイナー・クエリー  
フロイスの著作の内容は？

## 2. Is the English Spaniel of Japanese Origin ?

1857年10月10日号 2集4巻289頁 W. W. クエリー  
ペリーの連れ帰ったものが原種か？ 17世紀のサーリス船長の連れ帰ったものか？

## 3. Japan and her People

1859年3月17日号 2集7巻247頁 ミセラニアス  
A. Steinmetzの本について紹介。

## 【1860年代】

## 4. Bibliographie Japonaise

1860年3月17日号 2集9巻210頁 Gustave Masson ミセラニアス  
フランス語、英語などで出た日本関連文献を何点か紹介。

## 5. Japan

1861年9月14日号 2集12巻210頁 R. S. クエリー  
日本、江戸、蝦夷、京、長崎の語源は？

## 6. Japanese Ladies

1862年5月24日号 3集1巻409頁 Francis Mewburn クエリー

1869年1月9日号 4集3巻46頁 P. A. L. リプライ

1869年2月13日号 4集3巻152頁 H. Tiedeman リプライ

未婚の女性と既婚の女性の化粧の違い。お歯黒など。

## 7. Japanese Marriage Custom

1862年7月12日号 3集2巻27頁 E. N. H. クエリー

1872年7月13日号 4集10巻37頁 H. B. C. リプライ 「Japanese Marriage Ceremony」

日本女性は結婚に際して頭を剃るといいますが、レバントでも同様のことが。

## 8. Japanese in Europe

1862年9月20日号 3集2巻229頁 Abracadabra クエリー

1862年10月11日号 3集2巻297頁 β リプライ

遣欧少年使節団について。

## 【1870年代】

## 9. The Tycoon of Japan

1872年10月19日号 4集10巻310頁 John Piggot, Jun. ノート

1872年11月16日号 4集10巻391頁 F. O. Adams ノート

帝、大君、将軍の違いと歴史。

## 10. Japanese Folk Lore

1873年7月19日号 4集12巻44頁 W. H. Patterson フォークロア

『Nagasaki Express』から、狐の呪いについて。

## 11. Witchcraft in Japan

1875年8月7日号 5集4巻105頁 W. H. Patterson フォークロア

『Japan Herald』から、夫の浮気を封じるためのまじないを紹介。

## 12. Japanese Funeral Customs

1875年9月11日号 5集4巻205頁 Josiah Miller ノート

日本の葬式について。儀式の進行を紹介。

## 13. Japanese Superstition

1875年12月11日号 5集4巻463-464頁 W. H. Patterson ノート

- 『Japan Herald』から、狐が人をだます話。
14. Japanese Embassies to England  
1877年11月17日号 5集8巻388頁 K. H. Barnes クエリー  
日本大使について教えてほしい。
15. Japanese Proverb  
1877年11月24日号 5集8巻408頁 W. H. Patterson クエリー  
「勝って兜の緒を締めよ」に似たヨーロッパの諺はあるか？
16. Charms in Japan  
1878年1月26日号 5集9巻65頁 W. H. Patterson ノート  
『Japan Daily Herald』から、呪いが流行しているという噂を紹介。
17. Japanese Cookery  
1879年10月4日号 5集12巻262-263頁 W. H. Patterson ノート  
『Japan Weekly Mail』から、長崎でグラント将軍のために開かれた宴会で出た料理。
18. A Japan Vase  
1879年12月20日号 5集12巻488頁 A. クエリー  
日本製の壺を手に入れたのだが、どのくらいの価値のあるものか教えてほしい。
- 【1880年代】
19. Superstition in Japan  
1881年4月16日号 6集3巻306頁 W. H. Patterson ノート  
『Japan Gazette』から、穴熊が夢に出てきて、食物をくれなければ火事にすると脅した。
20. The Japanese Drama  
1881年5月28日号 6集3巻429頁 R. Inglis クエリー  
1881年9月10日号 6集4巻206頁 W. H. Patterson ノート 「Japanese Plays」  
『The Blood Stone』というのは日本の劇の翻案か？ 1879年に横浜で上演された。
21. Japanese Proverbs  
1882年3月4日号 6集5巻166頁 W. G. Black ノート  
Dixonによる日本の諺集について。
22. Curious Custom in Japan  
1882年3月11日号 6集5巻187頁 Everard Home Coleman ノート  
『Overland China Mail』から、琉球の洗骨について。
23. English Navigators in Japan, A. D. 1613  
1882年7月8日号 6集6巻28頁 Frederick Hendriks クエリー  
1882年10月14日号 6集6巻313-314頁 W. F. Prideaux リブライ  
平戸の商館長らの書き込みのある本。ウィリアム・コックス、ウィリアム・アダムズ。
24. Religions in Japan  
1882年7月15日号 6集6巻46頁 W. H. Patterson ノート  
『Japan Gazette』から、キリスト教を警戒する僧侶。
25. Japanese Matches  
1882年10月21日号 6集6巻326頁 W. H. Patterson ノート  
『Japan Daily Mail』から、日本製の最新マッチ。
26. Folk-Lore of Old Japan  
1882年11月18日号 6集6巻404-405頁 W. H. Patterson ノート  
さまざまな迷信を紹介。
27. Death of a Japanese Antiquary  
1882年11月18日号 6集6巻406-407頁 Wilfred Hargrave ノート  
蜷川式胤の死。
28. Lessons from Japan: Cleanliness, Preserving Trees  
1882年11月25日号 6集6巻426頁 W. E. Buckley ノート  
日本の清潔さ。神社などの樹木を守っていることについて。
29. Political Assassinations: a Parallel from Japan, A. D. 1879  
1882年12月9日号 6集6巻467頁 W. E. Buckley ノート  
公人の暗殺は恥ずべき行為とは考えられておらず、しばしば企てられる。

## 30. Japanese Furniture

1888年7月28日号 7集6巻66頁 W.P. ノート  
ドイツのBairouth夫人の所蔵していた日本家具について。

## 31. A Japanese Translation of the 'Imitatio Christi'

1889年10月5日号 7集8巻264-265頁 William E. A. Axon ノート  
『イミタチオ・クリスティ』の日本語版について。

## 【1890年代】

## 32. Topsy-Turvydom in Japan

1890年10月11日号 7集10巻286-287頁 E. Leaton-Blenkinsopp ノート  
チェンバレンの本から、日本とヨーロッパで正反対の事例について。

## 33. Japan

1890年11月1日号 7集10巻348頁 C. A. Ward クエリー  
日本の硬貨について。

## 34. Japanese Passports

1892年5月7日号 8集1巻373-374頁 James D. Butler クエリー  
横浜にいた頃はパスポートなしには汽車にも乗れなかった。面倒な悪法だ。

## 35. China v. Japan, 1600

1894年12月29日号 8集6巻506頁 W. C. B. ノート  
文禄・慶長の役。

## 36. Japanese Language

1896年3月28日号 8集9巻249頁 George Tompkins クエリー  
1896年4月25日号 8集9巻333頁 J. B. Fleming リプライ  
1896年4月25日号 8集9巻333頁 James Platt, Jun. リプライ  
1896年4月25日号 8集9巻333頁 George H. Hooton リプライ  
日本語の発音が知りたい。

## 37. Tattooing in Japan

1898年5月7日号 9集1巻368頁 Tatoo クエリー  
日本で刺青が禁止されたことについて。

## 【1900年代】

## 38. Japanese Folk-Lore: Launching a Warship

1900年12月15日号 9集6巻468頁 S. L. Petty クエリー  
パロウ・イン・ファーンレスで戦艦三笠が進水にすると、くす玉というのがあった。

## 39. Japanese Names

1901年7月6日号 9集8巻14頁 James Platt, Jun. ノート  
1901年7月20日号 9集8巻66-67頁 R. B. McKerrow リプライ  
1904年3月5日号 10集1巻187頁 James Platt, Jun. ノート  
1904年3月19日号 10集1巻238頁 Morris Bent リプライ  
川上音二郎。名前と名字。太郎と次郎など。

## 40. The Japanese Regalia

1902年3月22日号 9集9巻224頁 N. S. S. ノート  
三種の神器。

## 41. Japanese Monkeys

1903年1月3日号 9集11巻9頁 Frank Rede Fowke クエリー  
1903年1月24日号 9集11巻76頁 J. de Berniere Smith リプライ  
1903年1月24日号 9集11巻76頁 John Pickford リプライ  
1903年5月30日号 9集11巻430-432頁 南方熊楠 リプライ  
1903年6月27日号 9集11巻517頁 南方熊楠 リプライ  
1903年9月19日号 9集12巻237頁 南方熊楠 リプライ  
1904年4月23日号 10集1巻334頁 南方熊楠 リプライ  
三猿、日本の猿について。

## 42. Japanese New Year's Day

1904年1月9日号 10集1巻25-26頁 N. S. S. ノート

新年の儀式、なかでも飲食について。

43. Japanese Cards

- 1904年1月9日号 10集1巻29頁 James Platt, Jun. クエリー  
 1904年1月23日号 10集1巻75-76頁 F. Jessel リプライ  
 1904年1月23日号 10集1巻76頁 H. J. Gifford リプライ  
 花札について。

44. A Japanese Master of Lies

- 1904年6月18日号 10集1巻485-486頁 南方熊楠 ノート  
 嘘つきの名人の民話。

45. Antiquity of Japan

- 1905年2月25日号 10集3巻149頁 Frederick A. Edwards クエリー  
 1905年3月27日号 10集3巻414頁 Charles F. Forshaw リプライ  
 1905年3月27日号 10集3巻414-415頁 J. Holden MacMichael リプライ  
 日本の天皇家の古さはどれくらい？

46. Russians and Japanese: Official and Private Communications

- 1905年5月6日号 10集3巻347頁 H. Gaidoz クエリー  
 1905年5月27日号 10集3巻417頁 Robert Pierpoint リプライ  
 日露戦争の講和会議で用いられた言語は何か。リプライで英語およびロシア語と回答。

47. Japanese and Chinese Lyrics

- 1906年6月2日号 10集5巻429頁 S. J. A. F. クエリー  
 1906年6月16日号 10集5巻474-475頁 James Platt, Jun. リプライ  
 1906年12月29日号 10集6巻517頁 L. R. M. Strachan リプライ  
 1907年7月13日号 10集8巻34頁 L. R. M. Strachan リプライ  
 英語で良い本はないか。リプライでチェンバレン、ステントの本など。

48. Mohammedanism in Japan

- 1907年3月2日号 10集7巻167頁 南方熊楠 クエリー  
 日本にイスラム教徒が多数いると書かれた本があるが、実際にはいない。

【1910年代】

49. China and Japan: their Diplomatic Intercourse

- 1910年1月1日号 11集1巻8頁 H. Gaidoz クエリー  
 1910年2月19日号 11集1巻154頁 Willoughby Maycock リプライ  
 1910年3月14日号 11集1巻397頁 Rockingham リプラ  
 1910年6月25日号 11集1巻511頁 Rockingham リプライ  
 1910年8月20日号 11集2巻157頁 G. M. H. Playfair リプライ  
 中国と日本の条約、講和会議などには何語が使われているのか？ 英語も使われた。

50. Fly Painted on a Shield: Japanese Variant

- 1910年4月2日号 11集1巻266頁 南方熊楠 ノート  
 1910年5月7日号 11集1巻377頁 Edward Bensly リプライ  
 蠅を旗印にした武将。

51. The Blindfolded Man: Japanese Variants

- 1911年6月3日号 11集3巻424-425頁 南方熊楠 ノート  
 1912年1月6日号 11集5巻6-7頁 南方熊楠 ノート  
 覆面をして悟られないようにしたが、鳥の鳴き声などで盗賊の居場所がばれる。

52. Japanese Gods

- 1911年11月18日号 11集4巻407頁 Japan クエリー  
 神の名、信仰について教えてほしい。

53. The Emperor of Japan

- 1912年8月3日号 11集6巻100頁 オビチュアリ  
 明治天皇の死。

54. Heine and the Japanese

- 1912年11月2日号 11集6巻346頁 M. L. R. Breslar ノート  
 1842年頃にハイネの詩を訳した日本人がいた。ゲーテの『ウエルテル』の中国語訳。

## 55. Double Flowers in Japan

- 1913年3月8日号 11集7巻188頁 Peregrinus クエリー  
 1913年6月21日号 11集7巻490-491頁 南方熊楠 リプライ  
 1920年6月19日号 12集6巻310頁 南方熊楠 ノート  
 1921年9月3日号 12集9巻189頁 南方熊楠 ノート  
 日本にある八重の花について。

## 56. Japanese "Castéra"

- 1918年6月号 12集4巻158頁 Edward S. Dodgson クエリー  
 1918年9月号 12集4巻255頁 James T. Fox リプライ  
 1918年9月号 12集4巻255頁 Penry Lewis リプライ  
 カステラはスペイン語から？

## 【1920年代】

## 57. Japanese Artists

- 1921年5月21日号 12集8巻411頁 Muriel Hamilton Scott クエリー  
 京都の円山公園と知恩院について教えてほしい。

## 58. Hero and Leander: a Japanese Variant

- 1921年11月26日号 12集9巻425-426頁 南方熊楠 ノート  
 湖や海を渡って恋人に会いに行く娘の話。いずれも最後は溺れ死ぬ。

## 59. "Mr. Clawfurd of Japan Reputation"

- 1923年5月5日号 12集12巻352頁 J. M. Bulloch クエリー  
 クロウファードについての情報がほしい。

## 60. Plant-Symbolism in Japan

- 1923年10月13日号 13集1巻288-289頁 W. H. ノート  
 1923年10月27日号 13集1巻337頁 H. Prosser Chanter リプライ  
 1924年1月12日号 146巻34-35頁 南方熊楠 リプライ  
 門松、橙などについて。

## 61. Japanese Folk-Lore: the Dragon King

- 1925年3月14日号 148巻187頁 G. H. White クエリー  
 1925年4月4日号 148巻251頁 Archibald Sparke リプライ  
 1925年5月30日号 148巻390頁 南方熊楠 リプライ  
 大英博物館所蔵の絵に描かれている竜王にまつわる伝説が知りたい。

## 62. Japanese Mallet-Headed Sword

- 1925年12月12日号 149巻424頁 L. N. R. クエリー  
 1926年3月6日号 150巻175頁 南方熊楠 リプライ  
 熊襲征伐に使われた剣について知りたい。リプライで頭椎ではないかと回答。

## 63. The Hand-Saw of the Japanese Carpenter

- 1926年3月6日号 150巻171頁 Henry C. Mercer クエリー  
 日本で使う鋸について。大型で、引いて使う。

## 64. Japanese Street-Names in Great Britain

- 1926年8月28日号 151巻152頁 佐藤彦四郎 クエリー  
 台湾通りのほかにないか。

## 65. The Japanese Kami

- 1927年9月10日号 153巻189-190頁 G. W. H.  
 日本の神の概念、神降ろしについて。

## 66. Japanese Heraldry

- 1927年12月31日号 153巻479頁 R. L. クエリー  
 1928年3月24日号 154巻212頁 南方熊楠 リプライ  
 日本の家紋について。

## 67. Japanese Borrowing of European Words

- 1929年4月27日号 156巻298頁 E. クエリー  
 1929年6月29日号 156巻464-465頁 G. A. L. Goyle リプライ  
 1929年6月29日号 157巻373-374頁 佐藤彦四郎 リプライ  
 1929年7月13日号 157巻28頁 S. G. リプライ

- 1929年7月13日号 157巻28頁 佐藤彦四郎 リブライ  
 1929年7月13日号 157巻28頁 A. R. リブライ  
 1929年7月27日号 157巻70頁 Eric Smit リブライ  
 1929年10月12日号 157巻266頁 G. A. L. Goyle リブライ  
 1929年10月19日号 157巻284頁 南方熊楠 リブライ  
 日本語におけるヨーロッパ起源の単語。

【1930年代】

68. Japan  
 1931年3月28日号 160巻217頁 メモラビリア  
 開国以来の日本とフランスの関係。日本からの留学生がどこの国に何人いるか。
69. Japan in 1627  
 1931年7月11日号 161巻29頁 J. Landfear Lucas クエリー  
 1931年9月5日号 161巻177頁 南方熊楠 リブライ  
 1931年9月26日号 161巻233頁 佐藤彦四郎 リブライ  
 1627年のオランダ船の日本寄港。当時の貿易は？
70. Japanese Prisons  
 1931年8月8日号 161巻91頁 メモラビリア  
 日本の刑務所について。
71. Modern Japanese Methods  
 1931年12月19日号 161巻433頁 メモラビリア  
 日本の経済的成功について。パターナリズムのおかげだ。
72. Japanese Educational Ideals  
 1936年9月19日号 161巻199-200頁 メモラビリア  
 生徒に容赦なく、厳しくたたき込む点にヨーロッパと差異。
73. Japanese Phrase  
 1937年9月11日号 173巻193頁 C. E. H. クエリー  
 「案山子から盗んだ帽子に雨よたっぷり降れ」という諺は？
74. The Fox in Japanese Folk-Lore  
 1937年9月11日号 173巻193頁 C. E. H. クエリー  
 日本のフォークロアにおける狐。
75. Japanese Character in War  
 1938年5月21日号 174巻361頁 メモラビリア  
 きわめて優秀。武器の紹介、満州について。
76. Difference between Chinese and Japanese Culture  
 1938年9月17日号 175巻200頁 メモラビリア  
 特に文字の違いを紹介。
77. English Scholars in Japan  
 1939年1月7日号 176巻9頁 Otto Schmidt クエリー  
 日本にいる英国の文人のリストがほしい。ハーンのほかに英語教師は？
78. Japanese Heraldry  
 1939年4月1日号 176巻227頁 C. E. H. クエリー  
 日本の家紋についていろいろ知りたい。
79. Earliest Use of Japanese in Europe  
 1939年4月15日号 176巻262頁 David Shulman クエリー  
 1939年5月13日号 176巻339頁 H. Kendra Baker リブライ  
 少年使節団、ザビエル。
80. Japanese Folk-Lore: Sheep and Lion  
 1939年6月3日号 176巻390頁 M. U. H. R. クエリー  
 1939年7月1日号 177巻15頁 O. F. Babler リブライ  
 羊は日本にいないはず。ライオンはいるのか。ドイツ語で出た日本民話集に登場する。
81. Western Games in Japan  
 1939年9月30日号 177巻248頁 V. クエリー  
 日本で西洋スポーツは行われているのか？ ゴルフについてもっとも知りたい。



### ＜表2 アジア関連論考数＞

Korea 1本、Korean 1本	
China 234本、Chinese 174本、Cathay 9本	* China には磁器の意味での用例も
Thibet/Tibet 10本	
Tartar/Tatar 20本、Mongolian 1本	
Cochi China 1本	
India 262本、Indian 308本	
Persia 15本、Persian 56本	
Far East 6本	
Asia 21本、Asian 1本、Asiatic 12本	
Orient 3本、Oriental 53本	

見つかっていない<sup>(5)</sup>。少なくとも中国には、熊楠的役割を果たした人物はいなかったようだ。また注意すべきは、日本をふくむアジア関連論考は、総計数万本の論考のうちの千本ほどにすぎず、雑誌全体からすればごく少数に留まっている点である。ほとんどの論考のテーマはイギリスをはじめとする欧米世界にあった。しかし、それは当時の状況からすれば当然とも言え、むしろ千本は多いとみなすべきなのかもしれない<sup>(6)</sup>。

それでは、日本関連論考の分析に入りたい。タイトルに日本とある最初の論考は Henry T. Riley による 1 番 'Ludovicus Frois: his "History of Japan"' となる<sup>(7)</sup>。1857年6月13日号に出たマイナー・クエリーで、フロイスの著作の内容を問うている。しかし、リプライは出なかった。

1860年代には、5トピック9本の論考が出る。日本の民俗への関心があらわれ、またクエリーに対してリプライが付き始めている。リプライが出されるということは、日本への関心が共有され、情報を提供できるような人物が登場したことを示す。Francis Mewburn による 6 番 'Japanese Ladies' は日本の女性の風俗習慣を問うものであったが、当初は反応がなく、7年近くたって P. A. L. と H. Tiedeman がリプライを返し、未婚／既婚の女性の化粧の違いやお歯黒について情報を提供した。E. N. H. の 7 番 'Japanese Marriage Custom' には、H. B. C. が 'Japanese Marriage Ceremony' とタイトルを変更してリプライを返し、日本女性は結婚に際して頭を剃るというが、レバントでも同様の風習があると述べた<sup>(8)</sup>。比較文化の視点がもちこまれたことになる。何年もたって議論が再開されたり、「似ている」ことが重視されるのは『N & Q』誌の特徴であった。

その後は 1870年代に 10トピック 11本、1880年代に 13トピック 15本、1890年代に 6トピック 9本、1900年代に 11トピック 28本、1910年代に 8トピック 19本、1920年代に 11トピック 25本、1930年代に 14トピック 18本が出る。1900年代に飛躍的に増加したのは、日英同盟の調印と、熊楠が投稿を開始した影響であろうか。しかし、それ以降は増加というよりは、一定数で安定するように見える。なお、1910年代の落ち込みは、第一次大戦による月刊化（掲載論考数も激減）のためと考えられる。

テーマとしては、全時期を通して、日本とヨーロッパの歴史的・文化的な交渉を扱ったものが多い。2 番 'Is the English Spaniel of Japanese Origin?', 8 番 'Japanese in Europe', 23 番 'English

Navigators in Japan, A. D. 1613」、67 番 'Japanese Borrowing of European Words」、69 番 'Japan in 1627」、79 番 'Earliest Use of Japanese in Europe」、81 番 'Western Games in Japan」などである。言語についてのトピックも、テーマ的に東西交渉と重なる上記の 67 番と 79 番のほか、36 番 'Japanese Language」、39 番 'Japanese Names」がある。また、『N & Q』誌の主たる関心のひとつのフォークロア関連も目立ち、10 番 'Japanese Folk Lore」、11 番 'Witchcraft in Japan」、13 番 'Japanese Superstition」、16 番 'Charms in Japan」、19 番 'Superstition in Japan」、26 番 'Folk-Lore of Old Japan」、44 番 'A Japanese Master of Lies」、50 番 'Fly Painted on a Shield: Japanese Variant」、51 番 'The Blindfolded Man: Japanese Variants」、58 番 'Hero and Leander: a Japanese Variant」、61 番 'Japanese Folk-Lore: the Dragon King」、74 番 'The Fox in Japanese Folk-Lore」、80 番 'Japanese Folk-Lore: Sheep and Lion」がある。このほかにも、洗骨、新年の儀式など、民俗学・文化人類学的な話題が出ている。

時代によるテーマの変化は、あまりないように思われる。時事的な話題としては、38 番の S. L. Petty の 'Japanese Folk-Lore: Launching a Warship」がイギリスで製造された戦艦三笠の進水式について、46 番の H. Gaidoz の 'Russians and Japanese: Official and Private Communications」が日露戦争について取り上げている。

実際に日本を訪れた体験をもつ投稿者も 2 人いる。34 番 'Japanese Passports」の James D. Butler と 67 番 'Japanese Borrowing of European Words」の G. A. L. Goyle である。バトラーは横浜に、ゴイルは長崎に滞在したと論考中で述べている。また、<表 1>には出てこないが、来日中に『N & Q』誌に投稿したイギリス人として、ジェイムズ・ディクソンやトマス・ベイティらが確認されている<sup>(9)</sup>。

このほか、日本通と呼ぶべき人物が 2 人いる。ひとりめの W. H. Patterson は 11 本の日本関連論考を書いている。ベルファスト在住のアマチュア学者で、1870-80 年代に集中的に日本を取り上げた。内容的にはフォークロアが多い。日本で発行された英字新聞からの引用がほとんどで、『ジャパン・ヘラルド』紙、『ジャパン・ウィークリー・メール』紙、『ジャパン・ガゼット』紙などが使われている。多くは 1 年以上前の記事を引いており、日本の新聞を何らかの経緯で入手し、そこから記事を紹介していたものと思われる。

もうひとりとは James Platt, Jun. で、1890-1900 年代に 5 本を投稿している。彼については拙稿「南方熊楠と大事典の時代」で詳しく取り上げたが、アマチュア言語学者で、中国・日本通（どちらかという中国が中心）として知られ、投稿論考には言語やフォークロアへの関心が強くあらわれている。彼は資料として、B. H. チェンバレンら来日した欧米人の著作を利用している。『N & Q』誌に日本通が出現したことには意味があると考えられ、熊楠との比較が必要となるが、今後の課題としたい。なお、当時の著名なイギリス人ジャパノロジストたちの投稿は確認できない。チェンバレンやアーネスト・サトウらが『N & Q』誌に投稿することはなかったようである。

### 3. 南方熊楠

では、こうしたなかで熊楠はどのような活動を行っていたのだろうか。日本関連論考のすべてに目を通した結果、欧米人投稿者は、Patterson や Platt をふくめ、全員が英語やフランス語等で書かれた書物や新聞を利用しており、熊楠と佐藤のみが日本語の文献を使っていることが確認された。つまり、日本語を読めるというだけで、熊楠は圧倒的に有利な立場にあった（それに加えて英語で情報発信する能力も必要だが）。同時に熊楠は、日本に関心のある読者にとっても、きわめて有益で便利な存在となった。実際、クエリーには、熊楠を名指しで情報提供を求めるものも少なくなく、たとえば表1 >では、W. H. による60番 'Plant-Symbolism in Japan'（日本の正月飾りについての質問）が挙げられる。熊楠を通して、『N & Q』誌読者は日本について知りたいことを聞けたわけだ。では、熊楠はそうした状況を自覚し、自身でも意識的に日本についての専門家として振る舞っていたのだろうか。以下、熊楠が執筆した日本関連論考の本数を手がかりに考えてみたい。

熊楠の論考でタイトルに日本等とふくまれるものは13トピック19本になる。熊楠の『N & Q』誌掲載論考の総数は324本なので、日本関連論考の占める割合は約5.9%となる。意外に少ないというのが率直な感想である。もちろん、タイトルに「日本」となくとも日本について書いた論考は多く、特に西洋の話題にリプライとして日本の事例を提供した例は多数にのぼる。しかし、明確に「日本」と標榜したものは、これだけしかないのである。なお、日本関連論考が出た時期は分散しており、またテーマ的な偏りもないように見える。

さらに表1 >からは、熊楠の投稿の種類がわかる。まずノートとクエリー、すなわち熊楠がみずから話題提供したものは5本にすぎない。つづいてリプライを見ると、彼が日本関連のどのようなトピックに反応した／反応しなかったのかが明らかになる。リプライは8トピック13本を数える。1899-1933年を熊楠の投稿期間とすれば、この間の総トピック数は34件で、熊楠以外の誰かが口火を切った29件のうち、8件に反応したに留まる（なお、熊楠には投稿したものの掲載されなかった論考が約80本あり、日本関連では、43番 'Japanese Cards' へのリプライ草稿が南方熊楠顕彰館に現存し、そのほか日記から1907年7月17日に投稿したリプライ 'Japanese Monkeys' が確認される）。たとえば39番 'Japanese Names'、56番 'Japanese "Castéra"', 63番 'The Hand-Saw of the Japanese Carpenter'などは熊楠好みのテーマだが、リプライを出していない。

ここからは、熊楠がかならずしも「日本」という言葉に反応していたわけではないことがわかる。どんな話題であれ日本関連のトピックに飛びつき、専門家としてしゃしゃりであるようなスタンスは取っていなかったのである。

これを『ネイチャー』誌掲載論考と比較すると、ひとつの方向性が明らかになる。『ネイチャー』誌には熊楠の論考が51本掲載されたが、そのうちタイトルに「日本」とふくむものは1本、「中国」は7本、「ファー・イースト（邦訳では東洋）」が1本、「オリエント（邦訳では東洋）」が1本、「インド」が1本となる。日本関連は1本しかないのだが、ここではむしろ東洋というくくりで

考えたい。

これらの論考を年代順に見ていくと、投稿を開始した頃には、東洋という意識がきわめて強かったことがわかる。デビュー作が「東洋の星座」(\*ファー・イースト、1893年10月5日号)だったのに始まり、2本目「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」(1893年10月12日号)、3本目「蜂に関する東洋の俗信」(\*オリエンタル、1894年5月10日号)、6本目「北方に関する中国人の俗信について」(1894年11月8日号)、7本目「洞窟に関する中国人の俗信」(1894年11月15日号)、10本目「琥珀の起源についての中国人の見解」(1895年1月24日号)と、最初の10本のうち、6本のタイトルに東洋関連の言葉が入っているのである。ここに戦略的な意図が存在したのは明らかだろう。さらに指摘すれば、「東洋の星座」はM・A・Bの「星をグループ化して星座とすること」という論考へのリプライなのだが、あえてタイトルを付けなおし、「東洋」と入れている(オステン=サッケン「古代人のプーゴニア俗信についての質問」→熊楠「蜂に関する東洋の俗信」も同様)。すなわち熊楠は東洋の専門家としてイギリスの学会に入り込もうとしたのであり、こうした意識やスタンスは先行研究で指摘されてきたとおりと言える。しかし、本稿で注目したいのは、11本目以降、つまり11本目～51本目までの41本では、わずか4本しか東洋関連のタイトルが見られない点を指摘したい。10本目「琥珀の起源についての中国人の見解」の次に東洋関連の言葉が見えるのは、31本目「中国のベスト」(1899年2月16日号)で、その後は、35本目「中国の蟹災害」(1900年3月22日号)、41本目「日本の発見」(1903年4月30日号)、44本目「コノハムシに関する中国人の先駆的記述」(1907年12月26日号)となる。ここにはくっきりとした断裂がある。熊楠が掲載論考が10本になったのを一区切りと意識していたかはわからないが、1895年初頭に東洋専門というスタンスを変えたことが推察される。

そして熊楠が『N & Q』誌に投稿を始めるのは1899年であり、この時期にはもはや東洋/日本を前面に押し出すことはなくなっていたということになる。こうした意識変化については、中国や東洋といったアジア全体まで広げなければ十分な分析はできないが、ともかくここでは熊楠の『N & Q』誌論考のうちの東洋関連を簡単に見ておきたい。「中国」と入っているのは4トピック5本、「アジア」は1トピック2本、「ファー・イースト」は1トピック2本、「イースタン」は1トピック4本となる。けっして多いとは言えず、またたとえば中国については、『N & Q』誌全体で中国関連論考が約400本あるにも関わらず、4トピック5本しか出していない。中国関連トピックのほとんどに熊楠は反応しなかったことになる。これも熊楠の意識変化の傍証となる。

#### 4. 佐藤彦四郎

1940年以前の日本人投稿者としては、南方熊楠意外には佐藤彦四郎という人物がただひとり確認できる(1950年代以降は日本人英文学者の投稿が見られるようになり、現在では毎号のように出ている)<sup>(10)</sup>。しかし、佐藤の詳細についてはよくわかっていない。1920年頃からロンド

ンに住み、30年代後半まで活動していたようである。職業についても不明だが、官僚や日本企業の駐在員や留学生などではなく、個人で事業をしていたのではないと思われる。少なくとも、熊楠のような学者・研究者ではない。1921年に日本の皇太子（のちの昭和天皇）が渡欧した際の記念写真集である *Keepsake 1921*（イースタン・プレス、1921年）に肖像写真が出ているが、同書には牧野義雄、小泉軍治、石橋和訓、加藤章造らに在ロンドン日本人たちの写真が並んでおり、佐藤も当時の「名士」であったことがわかる。そのほか、在英日本人の住所録の *Japanese Directory 1931*（イースタン・プレス、1931年）にも名前が出ており、H. Sato, 4, Lloyds Avenue, London E.C.3. / Telephone : Royal 6995 / Telegrams : "Suppressor, Fen, London" とある。

佐藤の論考は、<表3>に示したように、1924-38年に26トピック27本（ノート1本、クエリー22本、リプライ4本）が掲載された。クエリーが多いのが特徴で、英語の書物やイギリスの地理について質問しており、『N & Q』誌を情報収集に利用していたことが見て取れる。熊楠とはちょうど反対に、佐藤は外国人読者として、イギリス人からイギリスのことを教えてもらっていたのである。テーマとしては、言語11本、民俗関連6本が挙げられるが、内容はあまりレベルの高いものではない。

南方熊楠顕彰館には佐藤からの熊楠宛て書簡が1通残っている。1928年3月3日付けで、住所・電話入りの用箋を使用し、シベリア経由でロンドンから田辺へ届いている。内容は別稿で翻刻紹介した<sup>(11)</sup>ので詳しくは取り上げないが、佐藤の出した‘The Blind Men and the Elephant’で「群盲象を撫でる」という日本の諺の欧米版を尋ねたのに熊楠がリプライを返した（1928年2月25日号。ただし、佐藤の質問に回答するような内容ではない）ことへの礼状である。また『イヴニング・ニュース』紙の1928年1月27日の紙面から、‘Kind Heart’と題するフォークロアをタイプ打ちしたものも同封されている。熊楠がこの書簡に返信したようすはない。

佐藤は熊楠を強く意識していたようで、熊楠の投稿‘Dreaming of a Balance’（1925年6月20日号）が、『N & Q』誌面に間違っただけで‘Drawing of a Balance’のタイトルで出てしまったときには、早くも翌週号に‘Kwampe Nyudoshinno’という論考を寄せ、‘Dreaming of a Balance’の誤りではないかと指摘し、本文中の誤植も訂正している。また、‘Paying by the Sound of Coins’で、蒲焼きを焼くにおいて飯を食べた男に、鰻屋が嗅ぎ賃を要求したところ、男は金をチャランと鳴らして、その音だけで払ったという日本の落語を紹介し、熊楠に原話を尋ねている。しかし、熊楠のリプライは出ていない。

## 5. ‘Japanese Borrowing of European Words’

ここでは、熊楠と佐藤がともにリプライを出した‘Japanese Borrowing of European Words’を詳しく見てみたい。議論の流れは<表4>に示した。

まず、1929年4月27日号でE. というイニシャルのみの投稿者が、日本語になったヨーロッパ起源の外来語について、「本誌の尊敬すべき日本人投稿者に教えてもらいたいのだが、日本人

＜表3 佐藤彦四郎の投稿一覧＞

1. The Old Bailey "in the Suburb"  
1924年3月29日号 146巻230頁 クエリー  
英語のsuburbの語源は？
2. Translation Wanted  
1925年5月16日号 148巻351頁 クエリー  
クラブロートが仏訳した『三国通覧図説』（林子平著）の英訳版はないか？
3. Kwampey Nyudoshinno  
1925年6月27日号 148巻460頁 クエリー  
熊楠が6月20日号に出した「Dreaming of a Balance」に関連して『慈覚大師伝』の著者は？
4. Pronunciation of "ei" in English  
1925年9月26日号 149巻224頁 クエリー  
eiで「アイ」と読む英語の単語を求む。
5. The Literature of Drinks  
1925年12月5日号 149巻403頁 クエリー  
紅茶やコーヒーが入る以前のイギリスの飲み物について言及している文献はないか？
6. Royal Charter  
1925年12月5日号 149巻403頁 クエリー  
ロイヤル・チャーターを受けることによる利益は何か？
7. Japanese Street-Names in Great Britain  
1926年8月28日号 151巻152頁 クエリー  
フォルモサ（台湾）街のほか、イギリスで日本の地名のつく場所はあるか？
8. English and French "W"  
1926年9月4日号 151巻171頁 クエリー  
Wをフランス語ではダブル・V、英語ではダブル・Uというのはなぜか？
9. The Blind Men and the Elephant  
1927年12月10日号 153巻425頁 クエリー  
「群盲象を撫でる」の欧米版は？
10. Adoption of Foreign Words  
1928年6月2日号 154巻390頁 クエリー  
アカデミー・フランセーズのような、外来語を審査する機関が他の国にもないか？
11. Russian Alphabet  
1928年6月9日号 154巻407頁 クエリー  
キリル文字の起源は？
12. Japanese Borrowing of European Words  
1929年5月25日号 156巻373-374頁 リプライ  
1929年7月13日号 157巻28頁 リプライ  
日本語になった外来語の例。日本語の綿の語源について。
13. London Statues  
1930年3月22日号 158巻206頁 クエリー  
コブデンの銅像、ワシントンの銅像についての質問。
14. Book on London Names  
1930年3月22日号 158巻206頁 クエリー  
ロンドンの公園や鉄道についてのガイドブックはないか？
15. "Cha"=Tea  
1930年3月22日号 158巻206頁 クエリー  
軍隊で紅茶を「Cha」という語源は？
16. Paying by the Sound of Coins  
1930年5月3日号 158巻318頁 リプライ  
日本の落語を紹介。鰻屋の匂いの嗅ぎ賃。熊楠に原話を尋ねる。
17. Man with Horns  
1930年9月6日号 159巻171頁 クエリー  
大阪の新聞から紹介。中国から来た角のある男が日本で見世物になっている。

18. Metal Destroying Insects  
1930年11月1日号 159巻314-315頁 ノート  
ドイツの科学誌から引用。金属に穴を開けてしまう昆虫の発見。
19. The Flag at Half-Mast  
1930年11月1日号 159巻317頁 クエリー  
半旗の慣習の起源は？
20. Books on National Ensigns  
1930年11月8日号 159巻333頁 クエリー  
国旗についての良い本はないか？
21. Bibliographical Query  
1931年4月18日号 160巻280頁 クエリー  
ローマ人とジプシーの、ヨーロッパやアフリカでの道路建設についての本はないか？
22. Japan in 1627  
1931年9月26日号 161巻233頁 リプライ  
ケンペルの本に、オランダ人が日本に持ち込んだもののリストが出ている。
23. "Net"  
1931年10月3日号 161巻246頁 クエリー  
本の値段を「net」というのはなぜか？
24. Old Oil-Painting to be Identified  
1931年11月21日号 161巻373頁 クエリー  
自分の所有する複製画のオリジナルとなった絵が知りたい。
25. "Mr." and "Mrs. and Miss"  
1932年10月1日号 163巻245頁 クエリー  
Mr. と Mrs. の使い方は？ 故人に使っても良いのか？
26. A Monument to the Repose of the Souls of Friend and Foe  
1938年6月4日号 174巻404-405頁 クエリー  
秀吉の朝鮮戦役ののち、敵兵のための慰霊碑が九州のあちこちに。他国にも例は？

<表4 'Japanese Borrowing of European Words' >

- 1929年4月27日号 156巻298頁 E. クエリー  
ヨーロッパの言葉で日本語に取り入れられた単語があれば教えてほしい。
- 1929年6月29日号 156巻464-465頁 G. A. L. Goyle リプライ  
長崎にいたころ、現地の歴史家コガ氏から聞いた。プリキ、カステラなど多数。  
そのなかに「綿」は cotton-wool、「印肉」は ink の転訛と。
- 1929年6月29日号 157巻373-374頁 佐藤彦四郎 リプライ  
手持ちの和英辞典から、ポルトガル語、スペイン語などに分け、非常に多数の例。
- 1929年7月13日号 157巻28頁 S. G. リプライ  
日本人の学者からモボとモガを聞いた
- 1929年7月13日号 157巻28頁 佐藤彦四郎 リプライ  
ゴイルの指摘する印肉と綿の例は間違いだろう。
- 1929年7月13日号 157巻28頁 A. R. リプライ  
ゴイルの綿はおかしいのでは。イタリア語のオヴァッタからオが落ちたのでは。
- 1929年7月27日号 157巻70頁 Eric Smit リプライ  
綿はオランダ語のワッテンからではないか。
- 1929年10月12日号 157巻266頁 G. A. L. Goyle リプライ  
佐藤の指摘する印肉は確かに間違い。  
綿は英語起源でないとしても、ドイツ語のヴァッテからではないか。
- 1929年10月19日号 157巻284頁 南方熊楠 リプライ  
寺島良安『和漢三才図会』、李時珍『本草綱目』、趙翼『陔余叢考』から綿を確定。  
古代中国から近代への意味と漢字の変遷。  
『古事記』、『万葉集』で早くもコットンにあたるものをワタと呼んでいる

がヨーロッパの発明や習慣を受け入れるにあたり、ヨーロッパの言葉をそのまま取り入れたものがあるか。普段の日本人同士の会話で、ヨーロッパの表現が何か使われたりするののか<sup>(12)</sup>と質問した<sup>(13)</sup>。「尊敬すべき日本人投稿者」とは、熊楠のことと考えられ、すなわち‘Japanese Borrowing of European Words’もまた、熊楠が『N & Q』誌の常連投稿者であったからこそ発せられたクエリーと言える。ところが、ここで佐藤が先んじてしまう。6月29日号にリプライを寄せ、手元にあったという井上十吉『和英辞典』（三省堂、1914年）を使い、スペイン語起源、ポルトガル語起源などに分けたうえで多数の例を示したのであった。ロンドン在住ゆえ、熊楠よりも早くリプライが書けたわけだ。

さて、問題を引き起こしたのが、佐藤と同日号に G. A. L. Goyle が出したリプライであった。長崎にいたころに現地の歴史家・コガ氏から聞いたという、プリキ、カステラなどを挙げていたのだが、このなかに「綿」はコットン・ウール、「印肉」はインクの転訛と述べられていたのである。すぐに佐藤が7月13日号で綿と印肉は誤りだと指摘したところ、綿についてはヨーロッパ人たちから再反論が出た。A. R. がイタリア語のオヴァッタからオが落ちた、Eric Smit がオランダ語のワッテンからではないか、G. A. L. Goyle が今度はドイツ語のヴァッテによると主張したのである。

結局、最後を締めたのは熊楠であった。10月19日号にリプライを寄せ、寺島良安『和漢三才図会』、李時珍『本草綱目』、趙翼『陔余叢考』を用い、「綿」という漢字と、それが指す植物について明らかにしたうえで、『古事記』や『万葉集』ですでにコットンにあたるものをワタと呼んでいると明確に結論づけたのである。

ここには熊楠と佐藤の差があらわれている。インク→印肉、コットン・ウール→綿が誤りだろうというのは、日本人であれば直感的にわかる。しかし、それを多数の資料を用い、学問的に語源をたどるなどして示せたのは、熊楠だけであった。この点で熊楠は佐藤を大きく引き離している。しかし、熊楠も大学などの研究機関に所属したわけではない。要するに熊楠も佐藤も同じアマチュアとして議論に参加していたことになる<sup>(14)</sup>。

## おわりに

以上のように、『N & Q』誌の日本関連論考から、誌面での日本への関心のありさま、熊楠の日本／東洋の情報提供者という自意識、佐藤彦四郎という人物について確認することができた。ここでは熊楠の自意識について、おおまかにまとめておきたい。

熊楠が東洋からの情報提供者という自覚をもち、また実際にそのように機能していたのは間違いない。特に『ネイチャー』誌に投稿を開始した当初は、意識的に中国や東洋といった言葉を使っていた。しかし、ある程度の立場を固めたのちは、そうした要素をことさらに見せつけるようなことはなくなる。もちろん、依然として論考の内容は日本・中国関係が多いのだが、テーマは全世界に広がり、欧米の文献が日本書や漢籍と並べられる。ここからは、熊楠の目指した学者とし



での在り方、学問の方法が見えてくると思われる。つまり熊楠は、東洋や日本という枠組みを超えた、全世界を相手にする国際的な研究者として自身を位置づけていたのであった。

## 注

- (1) 『N & Q』誌と熊楠についての研究は、以下を参照されたい。
  - ・拙稿「南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌 - 'Footprints and Gods, &c.' から「ダイダラハウシの足跡」へ」『ヴィクトリア朝文化研究』7号, 2009年。
  - ・拙稿「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代 - 『オックスフォード英語大辞典』、『イギリス人名事典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』と南方熊楠」『歴史文化社会論講座紀要』8号, 2011年。
  - ・拙稿「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌掲載論文の中のアジア」『南方熊楠とアジア』田村義也・松居竜五編, 勉誠出版, 2011年。
  - ・『完訳 南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』集英社, 2012年出版予定。
 テキストは『N & Q』本誌およびオンライン版を用いた。『N & Q』の巻号数については、原則として発行日を示した。「論考」としたのは、現在の学術的な論文とはスタイルが異なるためである。翻訳のある『ネイチャー』誌論考に関しては人名・タイトルとも訳に従って表記した。『N & Q』誌については英語のままとした。
- (2) 宮澤眞一「NOTES & QUERIES の日本関係記事にみる日英交流の推移」『埼玉女子短期大学研究紀要』4号, 1993年。
- (3) ・田村義也「イタリア古説話との出会い - 南方熊楠の『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌第一投稿をめぐって」『ユリイカ』40巻1号, 2008年。
  - ・——『『ネイチャー』誌論考中のアジア - 南方熊楠の最初期英文論考』『南方熊楠とアジア』。
  - ・『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』集英社, 2005年, 解説。
- (4) 初期にはマイナー・クエリー、フォークロアなどの欄も存在した。
- (5) 対象期間からは外れるが、1940年に画家・作家の蔣彝による論考2本が出ている。
- (6) 論考の内容も、もともとは欧米中心だったのが、次第にそれ以外の世界へと興味が広がっていく傾向が認められる。たとえば、1866年と1899-1904年の2回、同じテーマで議論の行われた「神跡考」を分析すると、テーマや引用文献が、1866年にはほぼ欧米にかぎられていたが、1899-1904年にはアジア、アフリカ、南北アメリカをふくむ全世界に広がっている。拙稿「南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌」。
- (7) タイトルに日本と入っていない論考で、最初に日本関連の話題を扱ったものは、確認できたなかでは、下記となる。1855年9月15日号、1集12巻202頁、C. B. A. 'Liberty'、マイナー・ノート、日本沿岸で沈没したロシア船乗組員への親切な扱いを指摘。
- (8) タイトルの変更は珍しいことではない。投稿者の誤記、内容の変化による改変、編集部によるトピック新設などによる。しかし、大きな意味があるわけではないようである。リプライには、それまでの議論の流れが巻号頁で注記されるため、追跡可能となる。
- (9) 拙稿「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代」96頁。
- (10) この少なさは『ネイチャー』誌などの理系学術誌に日本人が急速に進出した状況とは大きく異なっている。文系と理系の学問的な性質の差であろうか。
- (11) 拙稿「佐藤彦二郎」『熊楠 Works』38号, 2011年, 38頁。こちらに書簡の写真、翻刻、および佐藤の

肖像写真を掲載した。また、佐藤についての調査においては、恒松郁生氏、牧田健史氏にご協力いただいた。ここに感謝を捧げたい。

- (12) E., 'Japanese Borrowing of European Words', *N&Q*, Apr. 27, 1929, p. 298.
- (13) 議論を始めた E. なる人物の正体は不明である。近い号で類似のクエリーを出しているようなこともない。クエリーを出した目的も、この知識が何かに役立てられたのかも定かではない。
- (14) このことは以前から論じてきた『N & Q』誌が、さまざまなレベルのアマチュア知識人たちが集う場であったという分析を裏付けるものとなろう。